

# 『阿弥陀経』における「金沙の文」について

畝 部 俊 英

## はじめに

鳩摩羅什訳『阿弥陀経』(以下『阿弥陀経』という。402年訳出)<sup>(1)</sup>・「依報段」に次のような箇所がある。

又舎利弗、極楽国土、有七宝池。八功德水、充滿其中。池底純以金沙布地<sup>(2)</sup>。

(また舎利弗、極楽国土には、七宝の池あり。八功德水、その中に充滿せり。池の底にはもっぱら金沙をもって地に布けり。)

これは、極楽の七宝よりなる池には、八功德水が充滿していること、そしてその池の底はもっぱら「金沙」、すなわち「金の砂」が布かれていることを説いているのである。これに対して梵文『阿弥陀経』(*The Smaller Sukhāvativyūha*) には、

punar aparaṃ Śāriputra Sukhāvatyāṃ lokadhātau sapta-  
ratnamayyaḥ puṣkariṇyaḥ | tad yathā suvarṇasya rūpyasya vaidū-  
ryasya sphaṭikasya lohitaṃ muktasyāśmagarbhasya musāragalvasya  
saptamasya ratnasya | aṣṭāṅgopetavāriparipūrṇaḥ samatīrthikāḥ  
kākaṇṭhikāḥ suvarṇavālukāsaṃstrīṭhāḥ | <sup>(3)</sup>

(また、次に、シャーリプトラよ、極楽世界には、七つの宝石からできている、もろもろの蓮池がある。[それらの蓮池は] すなわち金・銀・瑠璃・水晶・赤真珠・瑪瑙・第七の宝石である琥珀からできていて、八

支をそなえた水によって満たされ、岸の高さと等しく、鳥が飲めるほどであり、金の砂が撒かれている (suvarṇavālukāsaṁṣṭrātāḥ)。

とある。

そこで、本稿においては、以下、『阿弥陀経』のように「池底純以金沙布地」とある文、あるいは梵文『阿弥陀経』のように「[それらの蓮池は]金の砂が撒かれている」とある文を「金沙の文」と名づけ、論文を進めていくこととする。

ところで、梵文の「金の砂が撒かれている」とある箇所には、『阿弥陀経』の「池底純以」にあたる語句がない。意味を明瞭にするために、訳出者・鳩摩羅什が「池底純以」という語句を補足したのであろうか、あるいは訳出に用いた原典には「池底純以」に相当する、何らかの語あるいは語句があったのであろうか。

極楽の光景に類似する描写が浄土経典以外の大乗経典の中にもしばしば見出されるとして、藤田宏達博士は「大乗経典における類似の描写」をいくつか挙げているが<sup>(4)</sup>、〈般若経〉における類例と〈華嚴経〉における類例、すなわち梵文『八千頌般若経』(Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā)に説かれているガンダヴァティー (Gandhavatī) という都城の描写と梵文『ガンダヴューハスートラ』(Gaṇḍavyūhasūtra, 以下梵文「入法界品」という)に説かれているサマンタヴューハ (Samantavyūha) という遊園とスプラバ (Suprabha) という大都城の描写を紹介している。その中において、梵文『八千頌般若経』では蓮池について「また池底は石英でできており、黄金の砂が撒かれている (suvarṇavālukāstirṇa)」という箇所があり<sup>(5)</sup>、梵文「入法界品」では壕について「底には黄金の砂が撒かれ (suvarṇavālikāsaṁṣṭirṇatala)」という箇所が見出される<sup>(6)</sup>。これは梵文『阿弥陀経』の「金沙の文」とほぼ同じであり、しかも梵文『八千頌般若経』の文にも梵文「入法界品」の文にも「底」(梵文『八千頌般若経』には 'adhobhūmi'<sup>(7)</sup>、梵文「入法界品」には、'tala'<sup>(8)</sup>とある)という語が見られる。とすれば、〈阿弥陀経〉における「金沙の文」は経典共通の定

型表現の一つであり、更に「底」という語がある「金沙の文」によって推測すれば、鳩摩羅什が『阿弥陀経』訳出に用いた原典には「底」に相当する語あるいは語句があったので、「池底純以」と訳したのではないかと考えることもできる。そこで、定型表現であるとすれば、梵文『八千頌般若経』と梵文「入法界品」以外に、どのような経典においてこの「金沙の文」が見出されるかということが問題となってくる。したがって、〈阿弥陀経〉に先だって成立した、あるいは同じ頃に成立したことが認められている経典における「金沙の文」を取り出し、検討してみることが必要となってくる。〈阿弥陀経〉に先立つ経典、あるいは同じ頃に成立したことが認められている経典としては、阿含・ニカーヤの経典、または成立の古い律典（Vinaya）とアビダルマ論書（Abhidharma）が阿含として引用している経典の文、そして初期大乘の経典ということになるが、南伝のニカーヤの経典には「金沙の文」は見当たらない。すなわち、この「金沙の文」は北伝の経典に見られる定型表現である。そこで、まず阿含の経典における「金沙の文」を見てみたい。

## 1

### 阿含の経典における「金沙の文」

(1) 竺仏念訳『長阿含経』卷三・(2)『遊行経』（413年訳出）<sup>(9)</sup>

昔者此国有王、名大善見。此城時\*名拘舍婆提、大王之都城。…。宝塹七重、…。下有金沙、布現其底<sup>(10)</sup>。

\*宋本、元本、明本では時は爾時とある。

（昔この国に王あり、大善見と名づく。この城を時に拘舍婆提と名づけ、大王の都城なり。…。宝塹は七重にして、…。下に金沙あり、その底を布現す。）

これは、諸学者によって〈阿弥陀経〉<sup>(11)</sup>の極楽の描写と類似していることが指摘されてきた箇所的一部分である<sup>(12)</sup>。クシナガリーの地が、かつて

大善見という転輪聖王の都城であり、そこは大変繁栄していて、素晴らしい国であったことを、今まさに涅槃に入ろうとしている釈尊が阿難に物語っていかれる描写であり、この都城の描写については、『阿弥陀経』・「依報段」の描写と類似する文として、拙著<sup>(13)</sup>においても部分に分けて取り上げているのであるが、ここではその都城は宝でできている湮が七重にめぐり、下に金沙があり、底に布かれていることを述べている。おそらく原文は『阿弥陀経』の「金沙の文」とほぼ同じものであろう。ここには「布現其底」と、「底」の語がある。

ところで、この『遊行経』・「大善見王」の箇所に対応する〈大善見王経〉類<sup>(14)</sup>の漢訳の諸本や復原された梵文『大善見王経』(*Mahāsudarśana-sūtra*)<sup>(15)</sup>には、この「金沙の文」は見当たらない(前述のように「金沙の文」は北伝の經典にのみ認められるものであるから、南伝の『長部』(*Dīgha-Nikāya*) 所収のパーリ文『大善見王経』(*Mahāsuddassana-suttanta*)<sup>(16)</sup>には「金沙の文」はない)。ただし、僧伽提婆訳『中阿含経』(398-401年訳出、正写)<sup>(17)</sup>・「相応品」所収の『大善見王経』には、(1)『長阿含経』・『遊行経』の「金沙の文」に相応する箇所において、「拘尸王城、於外周匝、有湮七重、…。其底布以四種宝沙。金・銀・琉璃及水精。」<sup>(18)</sup>(拘尸王の城は、外において周匝に、湮七重あり、…。その底は布くに四種の宝沙をもってす。金・銀・琉璃および水精なり。)、また華池を述べる文において「彼多羅樹間、作種種華池。…。其底布以四種宝沙。」<sup>(19)</sup>(かの多羅樹の間に、種々の華池を作る。…。その底は布くに四種の宝沙をもってす。)とあって、「金沙の文」と同じ表現の「宝沙の文」がある。「底」という語もある。

また、次のような訳例もある。

(2) 竺仏念訳『增壹阿含経』卷四十九・「非常品」(7)(385年訳出)<sup>(20)</sup>  
将来之世有仏、名弥勒、出現於世。爾時国界名雞頭王所治処、…。繞城七匝、有池\*水、各縦広一由延、金沙在下<sup>(21)</sup>。

\*宋本、元本、明本では四池とある。

（将来の世に仏あり、弥勒と名づけ、世に出現せん。その時の国界は雞頭と名づくる王の所治の処にして、…。城を繞ること七匝、池水あり、おのおの縦広一由延にして、金沙下にあり。）

これも「金沙の文」であると思われる。「底」という語はないが、「金沙在下」とある。

更に、訳出年は下がるが、闍那崛多訳『仏本行集經』（591年訳出）<sup>(22)</sup>における善見という転輪聖王の閻浮城の描写の中には「彼諸（宋、元、明の三本には「彼諸」は「於彼」とある）城外、有七重壑、周匝圍繞。彼壑甚深、八功德水、湛然盈滿。…。彼諸壑底、皆是金沙、…。」<sup>(23)</sup>（かの、もろもろの城の外に、七重の壑あり、周匝し圍繞す。かの壑は甚だ深く、八功德水、湛然として盈滿す。…。かの、もろもろの壑の底、みなこれ金沙にして、…。）とあり、あるいは「彼池水底、皆布金沙」<sup>(24)</sup>（かの池水の底には、みな金沙を布く。）とある。ここにも「底」という語がある。

（3）『長阿含經』卷十八・30『世記經』・「閻浮提洲品」

善住樹王北、有大浴池、名摩陀延。…。又其池底、金沙布散<sup>(25)</sup>。

（善住樹王の北に、大浴池あり、摩陀延と名づく。…。また、その池の底には、金沙布散す。）

現存の『長阿含經』が四分から構成されていることについて、「本来の『長阿含經』は第三分までであって、第四分は後世の付加である」とする見解が出されている<sup>(26)</sup>。この見解に従えば、この(3)『世記經』はまさに『長阿含經』の第四分であるので、後世の付加部分であり、内容も「後にアビダルマ論書において増広・発展していく仏教宇宙論への橋渡しともいうべき位置にある」ものであるが<sup>(27)</sup>、ここに「其池底、金沙布散」という「金沙の文」がある。この『世記經』には〈世記經〉類という名称で一括できる内容を有する漢訳の諸經典があるが<sup>(28)</sup>、それらの中で最も古い訳出の法炬訳『大樓炭經』（291－312年訳出）<sup>(29)</sup>にも「水底皆有金沙」<sup>(30)</sup>（水底にはみな金沙あり）とか「其水底皆金沙」<sup>(31)</sup>（その水底はみな金沙なり）という「金沙の文」が見出される。

### 律典における「金沙の文」

(4) 鳩摩羅什訳『十誦律』卷五十九（404年訳出）<sup>(32)</sup>

又一時、目連語諸比丘、北方有池、名漫陀緊尼。…。底布金沙。八功德水、常満其中、甜美如真蜜、…<sup>(33)</sup>。

（また一時、目連は諸比丘に語れり、北方に池あり、漫陀緊尼と名づく。…。底に金沙を布き、八功德水、常にその中に満ち、甜美なること真蜜のごとく、…と。）

『十誦律』は説一切有部の律典で、成立の比較的古いものと見られているが、ここには『阿弥陀經』と同じように「金沙の文」と共に「八功德水、常満其中」という文が出てくる。

### アビダルマ論書における「金沙の文」

(5) 真諦訳『立世阿毘曇論』卷二（559年訳出）<sup>(34)</sup>

其国諸江、八功德水、岸渚及底、並布金沙<sup>(35)</sup>。

（その国の諸江には、八功德水あり、岸渚および底には、並びに金沙を布く。）

『立世阿毘曇論』の訳出については「至梁末巳卯年（559）翻度此經為斷」<sup>(36)</sup>、あるいは「永定三年（559年）出」とされており<sup>(37)</sup>、そんなに古くはないが、この論書そのものの成立は「前2世紀頃」と見られている<sup>(38)</sup>。「八功德水」と共に「岸渚及底、並布金沙」とあるのが注意される。

以上、阿含の經典、成立の古い律典及びアビダルマ論書に「金沙の文」を探してみた。その結果、次のようなことが判明した。「金沙の文」は『長阿含經』所収の『遊行經』と『世記經』、〈世記經〉類の、最古訳の『大樓炭經』、『增壹阿含經』にある。また、『中阿含經』には「金沙の文」と同じ表現の「宝沙の文」がある。『阿弥陀經』のように「八功德水」の語句と共にある「金沙の文」ということになると、『仏本行集經』、律典の『十誦律』、アビダルマ論書の『立世阿毘曇論』に見出される。次に初期大乘の經典を見てみよう。梵文の現存する初期大乘の經典における「金沙の

文」は本稿の最初に取り上げた、藤田博士の「大乘経典における類似の描写」の中にあるように、梵文『八千頌般若経』と梵文「入法界品」にあり、そして梵文『無量寿経』にも見出される。なお、成立が「西暦 150 年頃」と見られている<sup>(39)</sup>梵文『ラリタヴィスタラ』にも「金沙の文」はある。

## 2

### 初期大乘の経典における「金沙の文」

#### (6) 梵文『八千頌般若経』

Adhobhūmiḥ karketana-mayī suvarṇavālukāstirnā | ...<sup>(40)</sup>

(底 (adhobhūmi) は石英からできていて、金の砂が撒かれていて、…)  
ここには「底」という言葉がある。既に述べておいたように、梵文『阿弥陀経』には「金の砂が撒かれている」(suvarṇavālukāstīrtāḥ) とだけあるが、『阿弥陀経』には「池底純以金沙布地」とある。この点について、「意味を明瞭にするために、鳩摩羅什が語句を補足したのであるのか、あるいは訳出に用いた原典には「池底純以」に相当する、何らかの語あるいは語句があったのであろうか」と疑問を出しておいたが、上のように梵文『八千頌般若経』のこの箇所には「底」という言葉があることからすれば、鳩摩羅什が語句を補足したのではなくて、『阿弥陀経』訳出に用いた原典にも「底」に相当する、何らかの語あるいは語句があった可能性が出てくる。次に梵文『八千頌般若経』に対応する漢訳の〈小品系般若経〉の中で、「金沙の文」が見出される経典を取り上げてみよう。

#### (7) 鳩摩羅什訳『小品般若波羅蜜経』卷十・「薩陀波崙品」(408 年訳出)<sup>(41)</sup>

一一園中、有八池水、…。玫瑰為底、金沙布上。…。其池成就八功德水<sup>(42)</sup>。

(一々の園中に、八池水あり、…。玫瑰をもって底となし、金沙をもつて上に布く。…。その池は八功德水を成就す。)

ここには『阿弥陀経』と同じように「底」という語があり、「八功德水」

という語もある。この箇所について鳩摩羅什は〈小品系般若経〉である『摩訶般若波羅蜜経』巻二十七（宋本、元本、明本、宮本では「三十」とある）・「常啼品」（404年訳出）<sup>(43)</sup>では、「一一園中、各有八池、…。玫瑰為池底、其上布金沙。…。其池成就八功德水（「八功德水」は、麗本では「八種功德」とある）。」<sup>(44)</sup>（一々の園中に、おのおの八池あり、…。玫瑰をもって池底となし、その上に金沙をもって布く。…。その池は八功德水を成就す。）と訳している。

- (8) 施護訳『仏母出生三法蔵般若波羅蜜多経』巻二十四・「常啼菩薩品」（1004年訳出）<sup>(45)</sup>

一一園中、有八大池、…。玫瑰為池底、金沙布上<sup>(46)</sup>。

（一々の園中に、八大池あり、…。玫瑰をもって底となし、金沙をもって上に布く。）

ここには「八功德水」という語は見当たらない。

以上、〈小品系般若経〉の中で「金沙の文」があるものを見てみた。梵文も漢訳経典も「底」という語があり、『小品般若波羅蜜経』には『阿弥陀経』と同じように「八功德水」という語もある。

- (9) 梵文「入法界品」

tasmin khalu punaḥ Samantavyūhe mahodyāne…daśa puṣkariṇīśa-  
tasahasrāṇi…suvārṇavālukāsaṁstirṇadaśaprasādakamaṇiratnākīr-  
ṇatalāni…aṣṭāṅgopetavāriparipūrṇāni… | <sup>(47)</sup>

（また、かのサマンタヴューハの大遊園においては、…、十・百・千の蓮池があり、…底（tala）には金の砂が撒かれ、水を澄浄にする十の摩尼珠寶が撒かれ、…八支をそなえた水によって満たされ、…。）

梵文「入法界品」における「金沙の文」は何か所かに見出されるが<sup>(48)</sup>、ここでは藤田博士が「〈華嚴経〉における類例」として最初に掲げているサマンタヴューハという遊園の描写の中から取り出してみた。「底」と訳した梵語は‘tala’である。また、藤田博士がもう一つの例として掲げているスプラバという大都市の描写の中の「金沙の文」は、既に紹介したよ



うに「底には黄金の砂が撒かれ (suvarṇavālikāsamstīrṇatala)」とあって、これも「底」という語は ‘tala’ で表されている<sup>(49)</sup>。梵文『八千頌般若経』の「金沙の文」では、上に見てきたように「底」は ‘adhobhūmi’ であるが、梵文「入法界品」では、‘tala’ で表されていて、『阿弥陀経』と同じように「八支をそなえた水によって満たされ」という文もある。

次に(9)梵文「入法界品」の「金沙の文」に相応する漢訳〈華嚴経〉・〈入法界品〉の箇所を見てみよう。

- (10) 仏駄跋陀羅訳『大方広仏華嚴経』卷四十七・「入法界品」第三十四  
(421年訳出)<sup>(50)</sup>

一万浴池、…。八功德水、湛然盈満。閻浮檀金沙、浄水宝珠、遍布池底<sup>(51)</sup>。

(一万の浴池は、…。八功德水は、湛然として盈満せり。閻浮檀金の沙と、水を浄める宝珠とを、遍く池底に布けり。)

この箇所では「金沙」は「閻浮檀金沙」とある。

- (11) 実叉難陀訳『大方広仏華嚴経』卷六十四・「入法界品」第三十九之五 (699年訳出)<sup>(52)</sup>

一万浴池、…。八功德水、湛然盈満。…。金沙布底。水清宝珠、周遍間錯<sup>(53)</sup>。

(一万の浴池は、…。八功德水は、湛然として盈満せり。…。金沙を底に布けり。水を清める宝珠は、周遍して間錯せり。)

- (12) 般若訳『大方広仏華嚴経』卷七・「入不思議解脱境界普賢行願品」  
(798年訳出)<sup>(54)</sup>

百万浴池、…。細妙金沙、澄布其底。…。水清宝珠、周遍間錯。昼夜常流八功德水<sup>(55)</sup>。

(百万の浴池は、…。細妙の金沙は、その底に澄み布かれり。…。水を清める宝珠は、周遍して間錯せり。昼夜常に八功德水を流す。)

以上のように、漢訳〈華嚴経〉・〈入法界品〉における「金沙の文」には、少しずつ異なるところもあるが、「底」という語があり、また「八功德水」

という語句もある。

次に、池ではなくて大河の描写の中に「金沙の文」がある梵文『無量寿経』の箇所を見てみよう。

(13) 梵文『無量寿経』(*The Larger Sukhāvativyūha*)

tās ca mahānadyo, …, vikardamāḥ, suvarṇavālikāsaṁstirṇāḥ.<sup>(56)</sup>

(また、これらの諸大河は、…、泥はなく、金の砂が撒かれている。)

上で見てきた梵文『八千頌般若経』と梵文『入法界品』の「金沙の文」においては語は異なるが、「底」に当たる言葉があったが、この梵文『無量寿経』には「底」に当たる言葉がない。これは現存の梵文『阿弥陀経』と同様である。また、梵文『無量寿経』には「泥はなく、金の砂が…」とあるが、『阿弥陀経』には「純以金沙」(もっぱら金沙をもって)とある。鳩摩羅什が「純」と訳したのは、この梵文『無量寿経』の「泥はなく」とあるような意味であったのであろうか。

この梵文の箇所は、五訳(または六訳<sup>(57)</sup>)現存する漢訳〈無量寿経〉の中で、「後期無量寿経」に属する、『無量寿如来会』にのみ相当箇所が見出される。

(14) 菩提流志訳『無量寿如来会』(『大宝積経』巻十八、706—713年訳出)<sup>(58)</sup>

彼極楽界、其地無海、而有諸河。…、其水清冷、具八功德。…、大河之下地布金沙<sup>(59)</sup>。

(かの極楽界は、其の地海なくして、しかももろもろの河あり。…、その水清冷にして、八功德を具せり。…、大河の下の地には金沙を布けり。)

「初期無量寿経」と呼ばれている<sup>(60)</sup>支謙訳『阿弥陀三耶三仏薩樓仏檀過度人道経』(『大阿弥陀経』、222—253 または 222—228 年訳出)<sup>(61)</sup>、『無量清浄平等覚経』<sup>(62)</sup>、そして「後期無量寿経」に属する仏陀跋陀羅・宝雲訳『無量寿経』(421 年訳出)<sup>(63)</sup>には、この箇所がなく、梵文『無量寿経』と、全体においてその梵文に最も近い『無量寿如来会』にのみあるのは、〈無量寿経〉成立後、この「金沙の文」が新たに付加された箇所の一つで

あるように思われる。とすれば、〈阿弥陀経〉の場合も、「底」の語のある『阿弥陀経』の「金沙の文」のほうが、「底」の語のない梵文『阿弥陀経』の「金沙の文」より古い表現であるように思われる。このことは、梵文『ラリタヴィスタラ』と、それに対応する漢訳の『普曜経』、そして『方広大莊嚴経』における「金沙の文」にも認められる。

(15) 梵文『ラリタヴィスタラ』

dvayoś ca tālayor madhye puṣkariṇī māpitābhūt | gandhodakapari-  
pūrṇā suvarṇavālikāsamstrtā…<sup>(64)</sup>

(また、二本のターラ樹の間に、蓮池が造られていた。香水が充満し、金の砂が撒かれ、…。)

この梵文の「金沙の文」には「底」に当たる語がない、『普曜経』には「底」という語がある。

(16) 竺法護訳『普曜経』巻五・「異学三部品」(308年訳出)<sup>(65)</sup>

両樹間有一浴池。池底金沙<sup>(66)</sup>。

(両々の樹間に一浴池あり。池の底には金沙あり。)

これに対して、『方広大莊嚴経』には、次のようにある。

(17) 地婆訶羅訳『方広大莊嚴経』巻八・「詣菩提場品」(683年または685年訳出)<sup>(67)</sup>

樹両間有七宝池。於彼池内、金沙遍布、香水盈満<sup>(68)</sup>。

(樹の両間に七宝の池あり。かの池の内において、金沙遍布し、香水盈満す。)

ここには「底」という語がない。漢訳であるから断定はできないが、原文は現存の梵文『ラリタヴィスタラ』のように「底」という語のない「金沙の文」であったのであろう。「底」という語が308年訳出の『普曜経』にあって、683年または685年訳出の『方広大莊嚴経』にないということは、「底」という語のある「金沙の文」のほうが、「底」のない「文」より古い表現と思われる。前述したように、このことは〈阿弥陀経〉の場合にも当てはまるように思う。「金沙の文」について、漢訳『阿弥陀経』に

「底」という語があり、梵文にはないのは、漢訳『阿弥陀経』の原本のほ  
うが「金沙の文」の古い定型表現であるからであろう。

既に見てきたように、阿含の経典（律と論に引用されている阿含の経典  
も含めて）にも出てくる「底」という語のある「金沙の文」は定型表現の  
一つとして大乘経典にも取り入れられて、しばしば用いられているうちに  
「底」という語がなくても、「池や大河の底に金沙が撒かれている」という  
意味で用いられるようになったのであろう。

## おわりに

本稿は、『阿弥陀経』における「金沙の文」について、梵文『阿弥陀経』  
には「金の砂が撒かれている」とだけあるのが、漢訳『阿弥陀経』には  
「池底純以金沙布地」とある。この点について「意味を明瞭にするために、  
訳出者・鳩摩羅什が「池底純以」という語句を補足したのであろうか、あ  
るいは訳出に用いた原典には、「池底純以」に相当する、何らかの語ある  
いは語句があったのであろうか」という問題を提起して、阿含の経典、成  
立の古い律典とアビダルマ論書が阿含として引用している経典の文、そし  
て初期大乘の経典より定型表現としての「金沙の文」を取り出し、検討し  
てみた。その結果、判明したことを列記すれば、以下のようなのである。

- (1) 「金沙の文」は、南伝のニカーヤの経典には見当たらないので、北  
伝の経典のみに見られる定型表現である。
- (2) 阿含の経典における「金沙の文」は『長阿含経』所収の『遊行経』  
と『世記経』、〈世記経〉類の、最古訳の『大樓炭経』、『增壹阿含経』  
にある。また、『中阿含経』には「金沙の文」と同じ表現の「宝珠の  
文」がある。
- (3) 『阿弥陀経』のように「八功德水」の語句と共にある「金沙の文」  
は、『十誦律』と『立世阿毘曇論』所引の阿含の文に見出される。
- (4) 初期大乘の経典における梵文の「金沙の文」としては、『八千頌般若

若経』に説かれているガンダヴァティーという都城の描写の中に「底 (adhobhūmi) は…、金の砂が撒かれていて」とあり、また、『ガンダヴァーハーストラ』（『華嚴経』・「入法界品」）にはサマンタヴァーハという大遊園の描写などの中に「底 (tala) には金の砂が撒かれ」とある。そして、それぞれ、これらの梵文に対応しているいくつかの漢訳の經典の箇所においても「底」の語が見え、「八功德水」の語句もある。これら二つの梵文經典によれば、「底」の梵語は ‘adhobhūmi’ か ‘tala’ で表されている。

- (5) 「底」という語のない、梵文の「金沙の文」は梵文『阿弥陀経』だけではなく、梵文『無量寿経』と『ラリタヴィスタラ』にある。そして、これら「底」という語のない、梵文の「金沙の文」に対応している、漢訳の經典の箇所と比べてみた結果、「金沙の文」は「底」という語のあるほうが古く、「底」のないほうが新しい表現であるように思われることが判明した。
- (6) その理由は、梵文『無量寿経』では、成立後に新しく付加されたと見られる箇所に「底」という語のない「金沙の文」があり、『ラリタヴィスタラ』では、対応する、古い漢訳『普曜経』（308年訳出）の「金沙の文」に「底」という語があり、訳出が新しい『方广大莊嚴経』（683年訳出）には「底」という語がないことを挙げることができるからである。
- (7) 恐らく「底」という語のある「金沙の文」が仏典において定型表現としてしばしば用いられているうちに、「底」という語がなくても、「池や河などの「底」に金沙が撒かれている」という意味の文として慣用されていくようになったのであろう。
- (8) 以上のことから、〈阿弥陀経〉における「金沙の文」においても、「底」という語のある『阿弥陀経』のほうが古く、「底」という語のない梵文『阿弥陀経』のほうが新しい表現であると思われる。
- (9) したがって、『阿弥陀経』の「金沙の文」にある「池底純以」とい

う箇所は、鳩摩羅什が補足したのではなく、梵文『八千頌般若経』や梵文「入法界品」のように、訳出に用いた原典に「底」に相当する、何らかの語あるいは語句があったのであろう。

註

- (1) 『阿弥陀経』の訳出者と訳出年については、僧祐撰『出三蔵記集』(以下『出三』という)巻二の「鳩摩羅什」の項に「無量寿経一卷或云阿弥陀経」(『大正新脩大蔵経』(以下『大正蔵』という)55巻、11頁、上段)とあり、費長房撰『歴代三蔵紀』(以下『三蔵紀』という)巻八の「鳩摩羅什」の項に「弘始四年(402)」(『大正蔵』49巻、78頁、上段)とある。このことについて、藤田宏達『原始浄土思想の研究』(岩波書店、1970年、第1刷)108頁参照。
- (2) 『大正蔵』12巻、346頁、下段-347頁、上段。
- (3) *The Smaller Sukhāvativyūha*, Emended text of F. Max Müller's edition by K. Fujita (以下 *Sm. Sukh.* という。藤田宏達『阿弥陀経講究』、真宗大谷派宗務所出版部、2001年、裏80頁、11-15行)。
- (4) 前掲、藤田宏達『原始浄土思想の研究』474-486頁。
- (5) 同上、476頁。
- (6) 同上、483頁。
- (7) *Abhisamayālaṃkāra' ālokā Prajñāparāmitāvyākhyā*, the Work of Haribhadra, ed. by U. Wogihara, Tokyo, The Toyo Bunko, Second printed 1973, p. 934, l. 19, *Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā* (以下 *AṣṭaP.* という), with Haribhadra's Commentary Called *Āloka*, ed. by P. L. Vaidya, Buddhist Sanskrit Texts-No. 4, Darbhanga, 1960, p. 241, l. 11.
- (8) *Gaṇḍavyūhasūtra* (以下 *GaṇḍV.* という), ed. by P. L. Vaidya, Buddhist Sanskrit Texts-No. 5, Darbhanga, 1960, p. 124, l. 20.
- (9) 『長阿含経』の訳出者と訳出年については、『出三』巻二の「仏駄耶舎」の項に「長阿含経二十二巻」とあり、割註に「秦弘始十五年(413)出。竺仏念伝訳」(『大正蔵』55巻、11頁、中段)とある。また、釈僧肇「長阿含経序」(『大正蔵』55巻、63頁、下段)も同じ。
- (10) 『大正蔵』1巻、21頁、中段。
- (11) 〈阿弥陀経〉というように、〈 〉をもって経名を表す場合は、諸異本のもとになった種々な原本の全体を総称するものとして用いる。前掲、藤田宏達『阿弥

『阿弥陀經』における「金沙の文」について

- 陀經講究』10 頁参照。
- (12) 前掲、藤田宏達『原始浄土思想の研究』469 頁参照。
  - (13) 拙著『『阿弥陀經』依報段試解』（真宗大谷派宗務所出版部、2002 年）
  - (14) 〈大善見王經〉類については、辛島静志「涅槃經（小乗）と大善見王物語」（『四天王寺』第 526 号所収、1985 年、69－82 頁）参照。
  - (15) *Das Mahāparinirvāṇasūtra*, Text in Sanskrit und Tibetisch, verglichen mit dem Pāli nebst einer Übersetzung der chinesischen Entsprechung im Vinaya der Mūlasarvāstivādins, auf Grund von Turfan-Handschriften herausgegeben und bearbeitet von Ernst Waldschmidt, Teil II, Abhandlungen der Deutschen Akademie der Wissenschaften zu Berlin, Klasse für Sprachen, Literatur und Kunst, Jahrgang 1950 Nr. 2., Akademie-Verlag Berlin, 1951, S. 202, 15. 5-6, S. 204, 15. 7. （臨川書店、1986 年、復刻）
  - (16) *The Dīgha-Nikāya*, ed. by T. W Rhys Davids and J. Estlin Carpenter, Vol. II, London, PTS. Repr. 1966, pp. 169-199.
  - (17) 『中阿含經』の訳出者と訳出年については、『出三』卷九所収の釈道慈「中阿含（含は宋、元、明の三本による。）經序」に「然後乃以晉隆安元年（397）…更出此中阿含。請罽賓沙門僧伽羅叉令講胡本、請僧伽提婆和軋胡為晉、…。至來二年（398）、…草本始訖。…乃至五年（401）…、方得正写、校定、流传」（『大正藏』55 卷、64 頁、上段）とある。この「經序」は、麗本（すなわち『大正藏』の底本）所収の『中阿含經』の末尾に、少し省略もあるが、「後出中阿含經記」（『大正藏』1 卷、809 頁、中一下段）として出ている。また『出三』卷二の「僧伽提婆」の項に「中阿含經六十卷」とあり、その割註に「晉隆安元年…訳出、至二年（398）…訖」（『大正藏』55 卷、10 頁、下段）とある。
  - (18) 『大正藏』1 卷、515 頁、中段。
  - (19) 同上、515 頁、下段。
  - (20) 『增壹阿含經』の訳出者と訳出年については、釈道安作「增一阿含序」に「仏念訳伝、…。歲在甲申夏出、至來年（385）春乃訖」（『大正藏』55 卷、64 頁、中段）とあり、未詳作者「僧伽羅刹集經後記」にも「使仏念為訳人」（『大正藏』55 卷、71 頁、下段）とある。また『出三』卷二にも「難提口誦胡本、竺仏念訳出」の二部の中の一經として「增一阿含經三十三卷秦建元二十年夏出、二十一年（385）春訖。…」（『大正藏』55 卷、10 頁、中段）とある。
  - (21) 『大正藏』2 卷、818 頁、下段。
  - (22) 『仏本行集經』の訳出者と訳出年については、『三宝紀』卷十二の「闍那崛多」の項に「開皇十二年」（『大正藏』49 卷、103 頁、中段）とあるが、脚註の宋本、

元本、明本、宮本にあるように、「開皇十一年（591）」とする。

- (23) 『大正蔵』3巻、660頁、上段。
- (24) 同上、下段。
- (25) 『大正蔵』1巻、117頁、上段－中段。
- (26) 前田恵学『原始仏教聖典の成立史研究』（山喜房仏書林、1964年、第1刷）620頁、およびその「註(4)」635頁参照。
- (27) 小山一行「解題」（『新国訳大蔵経』阿含部3、「長阿含経Ⅲ 他」（大蔵出版、1995年、4頁）。
- (28) 前掲、拙著、14頁参照。
- (29) 『大楞炭経』の訳出者と訳出年については、『出三』巻二の「法炬・法立」の項において、四部の中に「楞炭経六卷」とあり、「右四部、凡十二卷。晋惠懷（＋帝）宋、元、明の三本）時（291－312）、沙門法炬訳出」（『大正蔵』55巻、9頁、下段）とある。
- (30) 『大正蔵』1巻、292頁、上段。
- (31) 同上、中段、下段。
- (32) 『十誦律』については、『出三』巻二の「鳩摩羅什」の項に「十誦律六十一卷」（『大正蔵』55巻、11頁、上段）とあり、『三宝紀』では「弗若多羅」の項に「十誦律五十八卷」とあり、その割註に「弘始六年（404）…出」（『大正蔵』49巻、77頁、中段）とある。
- (33) 『大正蔵』23巻、440頁、下段。
- (34) 『立世阿毘曇論』については、この『論』巻九・「小三災疾疫品」第二十四の夾註に「至梁末己卯年（559）翻度此経為断」（『大正蔵』32巻、215頁、中段）とあり、『三宝紀』巻九の「真諦」の項に「立世阿毘曇十卷」とあり、割註に「永定三年（559）出」（『大正蔵』49巻、87頁、下段）とある。
- (35) 『大正蔵』32巻、180頁、中段。
- (36) 同上、215頁、中段。
- (37) 『大正蔵』49巻、87頁、下段。
- (38) 山本和彦「解説」（鎌田茂雄・河村孝照・中尾良信・福田亮成・吉元信行編『大蔵経全解説大辞典』、雄大閣出版、1998年、461頁）。
- (39) 外園幸一『ラリタヴィスタラの研究』上巻（大東出版社、1994年）102頁。
- (40) *AṣṭaP.* ed. by P. L. Vaidya, p. 241, l. 11.,
- (41) 『小品般若波羅蜜経』の訳出者と訳出年については、釈僧叡作「小品経序」に「究摩羅法師、…。以弘始十年（408）二月六日、請令出之、至四月三十日、校正都訖」（『大正蔵』55巻、55頁、上段）とある。『出三』巻二の「鳩摩羅什」の項に「新小品経七卷」とあり、割註に「弘始十年（408）…訳出、至四月二



『阿弥陀経』における「金沙の文」について

十日訖」(『大正蔵』55巻、10頁、下段)とある。

- (42) 『大正蔵』8巻、581頁、上段。
- (43) 『摩訶般若波羅蜜経』の訳出者と訳出年については、釈僧叡「大品経序」に「以弘始五年(403)…四月二十三日、…。法師手執胡本、口宣秦言。明年(404)四月二十三日乃訖」(『大正蔵』55巻、53頁、中段)とある。  
『出三』巻二の「鳩摩羅什」の項に「新大品経二十四巻」とあり、割註に「…弘始五年…訳出、至六年(404)四月二十三日訖」(『大正蔵』55巻、10頁、下段)とある。
- (44) 『大正蔵』8巻、417頁、中段。
- (45) 『仏母出生三法蔵般若波羅蜜多経』の訳出年については、『大中祥符法宝録』巻十二(『宋蔵遺珍』六(新文豊出版公司、中華民国六十七年)、3893頁、上段)に「起咸平六(1003)春、終景德元(1004)冬」とある。
- (46) 『大正蔵』8巻、669頁、中段。
- (47) *GaṇḍV. p. 79, ll. 13-19.* ただし、*daśaprasādanakamaṇiratnākīrṇa-* (p. 79, l. 18) の箇所は、藤田博士の修正(前掲、『原始浄土思想の研究』484頁、註(2)に従う。
- (48) 例えば、*GaṇḍV. p. 125, l. 22., p. 148, l. 22., p. 154, l. 26.* など。
- (49) 註(8)。
- (50) 仏駄跋陀羅訳『大方広仏華嚴経』については、「華嚴経記」(「出経後記」)に「以晋義熙十四年…、請天竺禪師仏度跋陀羅。手執梵文、訳胡爲晋。…。至大宋永初二年(421)校畢」(『大正蔵』55巻、60頁、下段-61頁、上段)とあり、『出三』巻二の「仏駄跋陀」の項に「永初二年(421)…都訖」(『大正蔵』55巻、11頁、下段)とある。
- (51) 『大正蔵』9巻、698頁、上段。
- (52) 実叉難陀訳『大方広仏華嚴経』については、智昇撰『開元釈教録』(以下『開元録』という)巻九の「実叉難陀」の項に「聖暦二年(699)…功畢」(『大正蔵』55巻、565頁、下段)とある。
- (53) 『大正蔵』10巻、343頁、上段。
- (54) 般若訳『大方広仏華嚴経』については、円照撰『貞元新定釈教目録』巻十七の「般若」の項に「貞元十四年(798)」(『大正蔵』55巻、895頁、中段)とある。
- (55) 『大正蔵』10巻、694頁、上段。
- (56) *Sukhāvāṭīvyūha*, édité par Atsueji Ashikaga, Kyoto, Librairie Hōzōkan, 1965, p. 35, l. 21.
- (57) 藤田宏達「無量寿経-阿弥陀仏と浄土-」(藤田宏達・櫻部 建『浄土仏教の思想(無量寿経・阿弥陀経)』第一巻、1994年、講談社、15-17頁)。

- (58) 『無量寿如来会』の訳出者と訳出年については、『開元録』巻九の「菩提流志」の項に「大宝積經一百二十卷」とあり、その割註に「神竜二年（706）創首、先天二年（713）功畢」（『大正蔵』55巻、569頁、中段）とあり、また、菩提流志の『大宝積經』訳出に関して述べている中で「始乎神竜二年（706）…、迄于睿宗先天二年（713）…、於中二十六会三十九卷、流志新訳。謂三律儀会、無辺莊嚴会、無量寿如来会、…」（『大正蔵』55巻、570頁、中段）とある。
- (59) 『大正蔵』11巻、96頁、下段-97頁、上段。
- (60) 「初期無量寿經」と「後期無量寿經」という呼称については、「『無量寿經』文献」（中村元・早島鏡正。紀野一義訳註『浄土三部經』（下）、ワイド版岩波文庫74、岩波書店、1991年、第1刷、194-195頁）参照。
- (61) 『阿弥陀三耶三仏薩樓仏檀過度人道經』の訳出者と訳出年については、『出三』巻二の「支謙」の項に「阿弥陀經二卷」とあり、割註に「内題云、阿弥陀三耶三仏薩樓檀過度人道經」（『大正蔵』55巻、6頁、下段）とある。また、この「支謙」の項の最後に「支謙以吳主孫權黃武初（222）至孫亮建興中（253）所訳出」（『大正蔵』55巻、7頁、上段）とある。なお、訳出年については法經等撰『衆經目錄』巻一（『大正蔵』55巻、119頁、中段）、彦棕撰『衆經目錄』巻二（『大正蔵』55巻、158頁、下段）、静泰撰『衆經目錄』巻二（『大正蔵』55巻、191頁、中段）、明佺等撰『大周刊定衆經目錄』（以下『大周録』という。『大正蔵』55巻、389頁、中段）では「黃武年（222-228）」。
- 前掲、藤田宏達『原始浄土思想の研究』51-55頁参照。
- (62) 『無量清浄平等覺經』の訳出者については、經録類の記述などにより、支婁迦讖説、帛延（または白延）説、竺法護説、その他の諸説があつて、今日まで決着がついていない。前掲、藤田宏達『原始浄土思想の研究』35-51頁、香川孝雄『浄土思想の成立史的研究』（山喜房仏書林、1993年）30-51頁参照。
- (63) 『無量寿經』の訳出者と訳出年については、『出三』巻二の「仏跋陀陀羅」の項に「新無量寿經二卷」とあり、割註に「永初二年（421）於（宋、元、明の三本には「於」なし）道場（宋、元、明の三本には道場+「寺」）出」（『大正蔵』55巻、11頁、下段）とあるのと、「宝雲」の項に「新無量寿經二卷」とあり、割註に「宋永初二年於道場寺出。一録云於六合山寺出」（『大正蔵』55巻、12頁、上段）とあること、その他の經録などを検討して、出されている藤田博士の「永初二年」、「仏陀跋陀羅・宝雲訳説」（前掲、『原始浄土思想の研究』69-77頁）に従う。
- (64) *Lalitavistara*, hrsg. von S. Lefmann, Halle a S., 1902., Erster Teil, S. 273, Z. 22-S. 274, Z. 1.
- (65) 『普曜經』の訳出者と訳出年については、未詳作者「普曜經記」に「永嘉二年

『阿弥陀経』における「金沙の文」について

- (308) …法護、在天水寺、手執胡本、口宣晋言」(『大正蔵』55巻、48頁、中一下段)とある、また、『出三』巻二の「竺法護」の項に「普耀経八巻」とあり、割註に「永嘉二年(308)五月出」(『大正蔵』55巻、7頁、中段)とある。
- 66) 『大正蔵』3巻、513頁、上段。
- 67) 『方广大莊嚴経』の訳出者と訳出年については、『開元録』巻九の「地婆訶羅」の項に「永淳二年(683)」(『大正蔵』55巻、563頁、下段)とある。『大周録』巻一の「地婆訶羅」の項には「垂拱元年(685)」(『大正蔵』55巻、379頁、下段)とある。
- 68) 『大正蔵』3巻、584頁、下段。